

〔個人研究〕

## 授業報告「キャンパスことばの現在」

小林 美恵子

(はじめに……授業の目的と対象生徒)

小論では、1993年4月から5月にかけて、勤務する都立高校3年「選択現代文」講座(受講者男8名女6名計14名)において行なった授業について、おもに生徒の反応を中心に報告する。

この授業では論文「キャンパスことばの現在」(遠藤織枝『大学時報』1993. 3 日本私立大学連盟)をテキストとして用い、生徒たちに日常何気なく使っていることばについての客観的な認識を持たせること、そこから出発して自分たちにとって自分を表すにもっともふさわしい表現とはどのようなものかを考えさせること、さらにそれらの思考の上に実際に文章表現を試みることを目的とした。

本講座は前年度、この学年をおもに担当していた前任者によって、現代文学を中心とするさまざまな文章をゼミ形式で読み解き、現代文に親しむことを目的に企画されたが、前任者の突然の転勤により私が担当することになったものである。したがって集まった14人はすべて前任者の授業を期待して講座を選択した、私にとっては面識のない者ばかりということになった。

4月当初、授業に先立って行なったアンケートによれば、受験のために現代文読解力をつけたいと答えたものは14名中3名にすぎず、他のほとんどは、いろいろな文を楽しく読めるようになりたいとか、国語は他の教科よりもラクそうだななどと考えてこの講座を選択している。教科としての国語についても得意であるとする者よりも、むしろ苦手だと考えている者が多い。日常生活の中で、どの程度文章に触れているかを知りたいと思い、行なったアンケートへの回答は次のとおりである。

(あなたは読書が好きですか)

- 好きだ —— 8名
- あまり好きでない —— 6名

(月に何冊ぐらい本を読みますか)

- 5～10冊 —— 2名
- 3～4冊 —— 2名
- 1～2冊 —— 2名
- ほとんど読まない —— 8名

(毎日、新聞を読みますか)

- 全体に毎日目を通す —— 1名
- だいたい読むが読まない日もある —— 2名
- 特定の記事には毎日目を通す —— 7名 (スポーツ欄—5名  
テレビ番組欄—4名 社会欄—1名 天声人語—1名 《複数回答》)
- ほとんど読まない —— 4名

(定期講読している雑誌がありますか)

- ある —— 1名 (STUDENT TIMES)
- ない —— 13名

高校3年生の状況としては、いささか心寒い感じだが、これが現実であることは否めない。(念のためいっておくが、これが本校生徒の、あるいは都立高校生の平均レベルというわけでは、もちろんない。)

われわれが高校生とともに学ぶとき、ことに評論教材などで心がけなくてはならないことの一つとして、書かれている理論と生徒たちの現実をどう結んでいくかということがある。本も新聞もほとんど読まず、親に守られて社会に関与することも少ない高校生たちの現実認識や社会性は想像を絶するほどに未成熟である。与えられる教材は、彼らにとっては新しい世界を開くものであるはずだが、現実認識が希薄で社会性も低いということは、新しいものを受容する能力が低いということでもある。文章を読まないということによる、言語能力・読解力の低さもあいまって、高校現代文の一般的な教材のレベルでは、読みこむ以前に忌避反応を示す者も多い。また、表面の意味は理解してもそれを自分の現実生活と照らし合わせて納得したり、共感したりあるいは批判したりというところまで到達するのは、教えるほうにも、教えられる者にも、なかなか困難な仕事なのである。

読むことを楽しみたいと願う、このような生徒たちに楽に読めて、しかも高校生としての現実に切り込む力を持つ教材を選ぶのもなかなか難しい仕事である。そのような教材の一つとして、今回、この「キャンパスことばの現在」を取り上げてみた。

(教材について)

「キャンパスことばの現在」は筆者・遠藤織枝氏が勤務する文教大学の学生に見られる言語生活上の事象を次の三点について報告し、論考したものである。

- ① 文章の用語に加わる話しことば的要素（言文一致の傾向）
- ② いわゆる「キャンパスことば」（若者ことば・学生語・流行語・新方言などがまじり合ったもの）
- ③ 男女のことばの歩み寄り（いわゆる「中性化」現象）

一つ一つの論点について、実証的な現況報告、学生自身の意見や批判的な立場の紹介、およびそれに対する筆者自身の意見という形で、それぞれすっきりとコンパクトにまとめてあり、文章の組みたても明快で読みやすい。生徒が、書かれていることと照らしつつ自分たちの言語生活を振り返り、そこから言語表現の意味について発展的に考えることのできる内容である。またその論旨は、若者たちが表現のためにそのようなことばを選び用いることの必然性を認め、支持する立場に貫かれており、若者たちが共感しながら読むことができる。後に述べるとおり、授業はまず、生徒たちに初読の感想を書かせることから始めたが、その中にも次のような意見が見られた。

- ・この文章は読みやすくてよかった。身近な事例を取り上げているので親しみのようなものを持って読めたと思う。（男A）
- ・全体的に目を通して見て、すべてのことが今の自分の言語生活について言われている気がした。（女A）
- ・この文章を読んでみて、納得することがとても多かったです。私も同じような文章の書き方をしていたり、同じようなことばを使っていると思うからです。この感想文にも、無意識のうちに話しことばを使っているのではないかと、少し心配になってしまいます。（女B）
- ・最近の女子学生のことばが男性化しているのは本当だと思う。これはあまり賛成できない。やはり女の子は女の子らしくしたほうが魅力的なのではないだろうか。それに対し、男性のことばが優しくなったとあるが、やはり女性に対し男性に対してよりもある程度優しくなるのは当たり前

だと思う。(男B)

(いずれも表記等は原文のまま。以下、生徒感想文については同様。)

多くの生徒が、この文章に取り上げられた大学生の言語事象を自分たちにも覚えがあるものとしている。さらに(女B)(男B)に見られるように、(筆者の支持的な筆致にもかかわらず)自分たちの「キャンパスことば」に対する不安ないし批判的な感じかたも目立った。このような感じかたを、単なる先入観的なものとしてとどめるのではなく、筆者の意見とも対応させつつなぜ、自分たちがそのように感じるのかという客観的な分析・内省にまで深めることによって彼ら自身の言語意識を育てたいと考えた。

#### (授業の流れ)

授業は次のような流れによって行なった。

- (1) 初読の感想……教材を読んで感じたことを800字程度で自由にまとめる。  
(1時間)
- (2) 文章全体の要旨をつかむ。(1時間)
  - ・筆者が報告している、大学生たちの言語生活に見られる現象を項目別に整理する。
  - ・それぞれの事象について、誰がどのような批判をしているか。
  - ・学生たちは、そのような事象についてどのように考えているか。
  - ・筆者はそれらについてどのように論評しているか。
- (3) 文章の用語に加わる話しことばの要素。(2時間)
  - ・生徒の初読の感想の中から選んだ文章をモデルに、文中から話しことば的な表現を抽出し、書きことばに直す。
  - ・各自の文章についてモデルを参考に、この視点から推敲をさせる。
- (4) 自分たちが使ったり、聞いたりすることのある「キャンパスことば」を採集してみる。(1時間)
  - ・筆者が本文中で行なっている分類(A短縮・省略 B逆にして言う C類義・転義による造語 D大げさな表現に E「する」「る」をつける)にしたがって身近な「キャンパスことば」を採集する。

- 大学生の「キャンパスことば」との比較。
  - そのようなことばを使うとき、あるいは使いたくないと考えるときの自分たちの意識を振り返る。
- (5) 男女のことばの接近について（1時間）
- 筆者は大学生・高校生へのアンケート調査結果を表にし、これをもとに男女のことばの接近を論じている。授業では、まずこの表にしたがって筆者の分析を確認した。
  - 自分たちのことばは調査の結果と一致しているかどうか確認する。
  - 男女のことばの接近について、どう考えるか意見発表（本文の大学生の意見を参考に）
- (6) まとめとして自分たちの言語生活、言語による表現について論じる。  
……800字程度（2時間）
- あらかじめ小論文の書き方について講義を行い、書かれたものについては助言の上、推敲をさせて完成論文とする。
- (7) 発 展
- 表現におけるレトリックの意味 （講義）
  - 小説「神々の歌」(清水義範)(注1) （講読）

(3)～(5)は自分たちのことばについて認識をさせるために行なったものである。ここに見られた生徒たちの意識についてまとめてみる。

### ① 文章語に加わる話しことば的要素

特に文章語における話しことばについては、高校生の場合、本人たちにはほとんどそれとは意識されずに用いられていることが多い。実際に自分の書いた文章から、そのような表現をピックアップすることによってそれが多用されていることを認識させたわけである。筆者はこのような表現について、

無理に書きことばに統一しようとして活字離れを助長するより、思ったままとらわれずに書く学生たちの自由さを認めるほうが、文章表現力回復に力を貸せそうだとみるのは、楽観的すぎるだろうか。

と、疑問の形ながらも、容認の姿勢である。これは、現在の小学校から高校にいたる自由作文の教育姿勢とも共通しているように思われる。特に戦後の作文教育の中では「感じたことを感じたままに、思ったことを思ったとおりに書き表わす」ことが何より重視され、定式どおりの文章(紋切型)や美文調レトリックなどは型にはまったものとして排される傾向にあった。もちろん、そのことにはそのことなりの意味はあったろう。実際に高校生が友達どうしでやりとりする手紙などに見られる文体は、のびのびと自由な話しことばそのままといったものが多く、そのような文体によってこそ彼らは自由な意志の疎通ができるし互いに共感しあえるのだともいえよう。

しかし、友達とは長い手紙のやりとりもいとわぬ生徒が、書くことは苦手だ、小論文をどう書いたらよいかかわからないというような悩みを同時に持っているのも事実である。彼らは大学受験で求められる小論文に友達に書く手紙の文体が通用しないことを十分承知している。それが(女B)の感想に見られた「心配になってしまう」ということばなどにも現われているといえよう。ときには若者たちの自由な発想を矯め、型にはめることになる危険性もあるとは思いながらも、高校の文章指導では「文章語で書かれた文章らしい文章」のありようを伝えていく必要を否定できない。その意味で本授業では単に文章中に見られる話しことばの指摘にとどまらず、それを文章語に直すという形での推敲まで行ってみたのである。

## ② 「キャンパスことば」について

いわゆる「キャンパスことば」については、初読の感想の中に自分はそのようなことばは使いたくないとかほとんど使っていないなどと書いた者もあったので、自分が使わなくても、耳にすることがあるというものを含め、身近の「キャンパスことば」を拾ってみることにした。彼らの採集した語の多くは大学生のそれと重なるものであったが、マック(マクドナルド)、モス(モスバーガー)、ジョナス(ジョナサン)、サンサン(サンデーサン)、デニ屋(デニーズ)、ケンタ(ケンタッキーフライドチキン)、イレブン(セブンイレブン)など、ファーストフード、ファミリーレスト

ラン、コンビニエンスストアの短縮・省略形が大学生よりは目立ち、ゲーセン（ゲームセンター）も多くの生徒が使っている。ポテチ（ポテトチップス）、ポカリ（ポカリスエット）等の食品名、ケイハチ（京王八王子）ニッパチ（西八王子）などの地名もあわせ、これらの「キャンパスことば」が彼らの生活に密着したところに成り立っていることがわかる。遠藤氏が「かなり古くから使われ、新方言の代表格ともされる」「他の複合語を作る造語成分になったりして、生命力の強さを示している」と紹介された「チャリンコ」（自転車）については大学生のあげた「ママチャリ」「マンチャリ」「チャリ通」に加えて「原チャリ」「原チャ」（原動機付自転車）、また「セッチャリ」（窃盗自転車）「カッチャリ」（かっぱらった自転車）などという語もあげられており校内でしばしば自転車盗難（寸借？）が起こる事実とも考え合わせると空恐ろしいという感じがしないでもない。これらの語を用いる高校生たちの意識は、本文中に

これらの若者ことばについて、ことばを乱すものとして否定的にみる学生もいるが、多くは、仲間同士の連帯感の表われとして、またことばで遊ぶことが楽しいとして、肯定的にとらえている。しかし、それも学生である間だけで、社会では通用しないことも自覚している。

と書かれた、大学生の意識と大きく変わることはないと思われる。ただ、初読の感想では

- このような言葉を自分なりに考えると言葉で遊んだり楽しもうというような気持ちはないような気がする。ただ周りの人間が、言葉を省略したり、逆にしたり、転義したり、大げさな表現を使っているので、自分たちも流されて使っているだけで、こんなに分析しなくてもいいと思う。  
（男C）
- 僕に言わせれば、言葉なんてものは何の気なしに使っているものであって、筆者の書いたように、こういう語源からきているとか、新方言がどうのといわれても、なんと答えてよいものか困る。（男D）
- 仲間どうしで話してる時のことばなので、その間で通じればどんなこと

ばでもいいと思う。他の人としゃべる時に標準語(マツ)が使えれば困ることはない。(男E)

のように、「キャンパスことば」に表現としての意味を見いだそうとする筆者の姿勢への反感を示したり、「使い分け」ができれば文句ないだろうと居直るような筆致が目立った。いっぽう、このようなことばは耳障りなので使いたくないという意見も多く、大学生よりは高校生のほうが屈折した反応を示しているという気がする。これは、一つには高校生のほうが学校教育や家庭教育による規範意識の植え付け(=社会的圧力)を直接的に受けていること、また一つにはそういう状況を大学生のように客観的に分析し得ない、彼らの未熟さによるのではないかと考える。それらによって、彼らはことばをごく狭い仲間内での限られた世界でのみ、楽しむとか遊ぶというよりは仲間内のアイデンティティを示すものとして流通させる。外の世界に住む、たとえば親や教師はこの仲間内の言語世界には参加を許されない。つまり、生徒たちは親や教師にむかっては、このような「キャンパスことば」を決して用いない。また外からの批評については、たとえそれが好意的なものであっても抵抗を示すのである。

### ③ 男女のことばの接近

男女のことばの接近についても、実態とは別に高校生を支配する規範意識の存在を見ることができる。すでに報告したとおり(注2) おもに女子高校生のことばが中性化し、男性のことばに接近していることは紛れもない事実である。これについて生徒たちはつぎのように書いている。

- ・自分でも気になっているが、これがなかなか女性らしくならない。最近、自分があまりにも口がわるいので、男に生まれてくるべきだったとさえ思う。(女C)
- ・ことばが男性化の傾向にあるのは、私もあまり女らしいことばを上手に使えないのでわかるような気がします。でも女の人が乱暴なことばを使うのはあまり好ましいことではないと思っているので「中性化」にとどめられたらいいと思います。(女D)

現代の女子高校生にとって、いわゆる「女性語」を用いないということはすでに自然な表現のスタイルになっているといっても過言ではない。それにもかかわらず、先にあげた(男B)の意見も含め、「女性らしくない」ことばづかいへの批判やひけめが厳然としてあるのは、特に女子高校生の言語表現にとっては不幸なことと言わざるを得ない。

これに対しては遠藤氏が紹介された大学生の、中性化を当然とし、女性語・男性語という概念自体を不当とする意見は非常に効果的に働いたようだ。

次にあげるのは、授業後女子生徒たちが書いた文章である。

- 今の女性は、社会進出にともない男のことば<sup>(33)</sup>を使っている女性が多い。これは社会にでた女性が男性より劣っているという、世間一般の考え方を覆すものであり、女性の社会進出の第一歩とも言えよう。男は男らしく、女は女らしくという考え方も見方を変えて見ると女性差別にも見えてくる。(女E)
- 親や先生と話していて、言葉遣いについて注意を受けるのは決まって女性である。言葉を注意されている男性なんて見たことがない。大半の女性が言葉遣いについて注意を受けたことがあると思うが、その時点で女性らしく変化できたのだろうか。女性らしい言葉遣いの方は、少なくとも私の知っている範囲では一人もいない。

昔は今よりずっと男女差があったから「女言葉」「男言葉」ははっきりと隔てられたが、今は女性と男性が同じ職場で働くようになったり、学校は共学で、男性と触れ合う機会が多いので女性が男性の影響を受けるのは当然である。(女D)

文章としての完成度はともかくとして、ここにはそれまで「女らしさ」という規範に縛られていた彼女たちの解放の萌芽とでもいうべきを見ることが出来る。

(まとめ)

以上のように、遠藤論文「キャンパスことばの現在」を通して、高校生たちがことばを使うとき、彼ら自身のうちにあるものをも含めこうあるべきだ

という規範意識が強く働いていること、それと同時に、表現をするときにそのような規範意識にとらわれない自由な表現の可能性というものが常にあること、いわゆる「キャンパスことば」を可能性の一つとして肯定的にとらえることもできるのだということを生徒とともに検証してみたわけである。このような検証を通して、彼らに意識的にことばを選ぶという習慣や、自らの選んだことばへの自信を身につけてほしいと考える。

授業後のまとめとして書かれた感想の中には次のようなものも見られた。

- 言葉のたくさんの領域（社会人の言葉・学生言葉・標準語・方言・男性語・女性語など）の中で、今私は少なくとも、女、学生という身分で周りの環境に合わせて話していくことになります。自由に使えない言葉の世界に、私は不満はありません。ないというより、不満に感じないようなルートをたどって、私だけでなく大多数の人は、この言葉の社会にうまく入り込んでいるのだと思う。（女F）

教材やそれを使っの授業の意図するところからみれば、必ずしもねらいどおりの受け取り方とは言えないかもしれない。しかしそれまで何気なく使っていたことばに対して、自分なりの認識を持とうとしはじめている点を評価したい。彼女がことばによる表現を続けていくかぎり、必ず「自由でない」ことへの不満はでてくるだろう。その段階で本授業での試みが彼女の中にどのような意味を持ってよみがえるかが楽しみである。

なお、この授業では引き続き、言語による表現のさらなる可能性を求めるといった目的のもとに「社会的な考え方に一つの新しい見方を導入する」(注3)ものとしてのレトリックのありようについて考え、さらにそのようなレトリックの効果によって一つの世界が構築されている好例として、清水義範の小説を読んでみるというふうな発展させたが、これについてはまた別の機会に報告したい。

注1 「神々のうた」清水義範1982.8『SFアドベンチャー』講談社文庫所収

注2 「世代と女性語 — 若い世代のことばの中性化について」小林美恵子

明治書院『日本語学』1993.3臨時増刊号(「世界の女性語 日本の女性語」)

注3 「国語文章論」波多野完治1933